episode.07

未来へ繋ぐホタル舟観光

話し手 奥薩摩のホタルを守る会　会長
栗野（くりの） 明男（あきお）さん（昭和 28 年 10 月 8 日生）

聞き手 鹿児島県立薩摩中央高等学校
２年　海野　千晴
２年　小西　綺音
２年　佐藤　暖

「ホタル舟のはじまり」

鹿児島県庁の職員の方と旧鶴田町職員の方の人事交流があって、鹿児島県庁からいらっしゃった職員の方が川内川の近くに住んでいたのですが、「夜に川を見ていて、こんなにホタルが飛ぶのにこの町はこれをどうして活用しないのかな、地域おこしになるのにね」っておっしゃいました。有志の方々に呼びかけて、川船の操作をお願いして、ここは最初ホタル舟をもたなかったので、ドラゴンボートにお客さんを乗せて第一回目をしたんですよ。それが平成 14 年ですね。そして地域が盛り上がって今まで続いてきました。第一回目からずっと来ていらっしゃるお客様もいます。全国に呼びかけているので、東京や大阪、中国など外国の方もいらっしゃいます。

「ホタル舟の現在と課題」

さつま町といえばホタルというように、ホタルはさつま町の一部、観光資源ですね。
私が小さい頃は家の中までホタルが入ってきていました。見に行かなくても自分の庭先に飛んでいて、窓を開けていれば家の中まで入ってくるような状況でした。

ホタル舟の一番最盛期の頃は、ホタルの明かりで本が読めると言うぐらいにホタルがたくさんいました。でも、2006 年（平成 18 年）の水害で一時的に少なくなったんですよ。でも 2019 年頃には戻りつつあり運航もしていました。でも、新型コロナになってからは運航中止になってしまいました。さらに、その期間中にホタルの数も減ってしまい、今年も数えられる程度です。

ホタル舟が運航できない関係で、資金が底をついてしまいました。舟を運航すると、岩に当たったり、エンジンがダメになったり、舟の修理にはだいぶかかるんですよ。舟の修理は今まで守る会がしています。

また、ホタル舟を運航するスタッフは、船頭さんや受付、駐車場係、誘導係など多くの方が関わっていらっしゃいます。そのスタッフの高齢化が一番大変です。特に舟を漕ぐ船頭さんが高齢化で年々いなくなっています。今年、若い方々が５名やってみようということで、ベテランの船頭さんがついて練習をしました。一週間すると、慣れてきてくるんですけど、お客さんが乗れば舟が重たいので、川の流れに乗せるのは難しいみたいですね。

「ホタル回復のために」

ホタルは瀬になったところによくいます。川の流れが少し速くなっている所は、岩についている汚れが落ちて苔が生えます。それを“カワビナ”という小さい貝が食べる。ホタルは、きれいな川の砂地に産卵して、ふ化した幼虫がそのカワビナを食べる。「カワビナがいない」＝「ホタルもいない」ということです。平成 18 年の水害でカワビナが一時的に少なくなったけど、全盛期とまではいきませんが戻りつつありました。そうしたら今度はダムの工事が始まって、川が濁ってしまったので、苔が石につかないからカワビナがいなくなりました。まだ支流とか水路とかそういうところにはいるけれど、それがまた川内川に出てくるまで何年かかるか分からない。

ホタル回復のために、河川清掃をしています。カワビナが戻るのを期待して、河川をきれいにしようと思って取り組んでいます。

「これからのホタル舟観光」

ホタル舟は、今年も中止なってしまいましたが、船頭さんの練習はしています。さつま町は「ホタルの街」ですから、辞めるわけにはいかないです。仲間とも来年に向けた話は進めてはいます。

今後は、観光協会と連携をしながら、町の広報誌での人材募集の呼びかけや補助金などで町にも応援をいただきながら、自分たちでできるところは自分たちで工夫したりしていけたらいいですね。